

景観論から建築設計の世界へ



会田友朗

今春、ようやくコロナ禍も落ち着きを見せた新学期。非常勤講師を務める大学の製図室に集まる2年生に、小規模パブリックスペース(公園)の設計課題の小テーマ「Meaningful Garden～意味に満ちた庭～」をA4一枚にまとめて配布した。幾分抽象的な問いに狐につままれたような表情の学生たちだったが、今後のエスキスはどうか。内容に直接的な関係はないが、この連載タイトルにあえて同じ名を与えた。僕自身も彼らと並走し、新たな課題に挑むつもりで原稿に向かおう。

思えば30年近く前、僕自身は東京工業大学の社会工学科で公園をはじめとするまさにパブリックスペースの設計課題に取り組んでいた。4年生になり景観工学の中村良夫研究室の扉を叩き、その後米国東海岸に留学、美術大学の建築学部編入・卒業、その後大学院にて建築学を修了し、ニューヨークの設計事務所で1年間働いた。計5年滞在の後に帰国後まもなく幸運にも公共建築(博物館)の設計監修に携わる機会を得て、共同で事務所を設立した。2009年、自らの設計事務所へ改組し、現在は東京・神楽坂にアトリエを構えている。本連載では、こうした来歴を時間順に辿る予定だ。しばらくお付き合いいただければ幸いである。

記号論をベースにした風景研究

さて、恩師である中村良夫先生は、土木分野において日本の景観工学の礎を築いた1人である。数多くの理論的な著作とともに景観デザインの実践にも携わるが、僕が研究室に入った頃は代表作の古河総合公園の仕事がちょうどひと段落し、哲学的な思考の探求に重心を移していた頃であったと思う。先生の景観論の講義は、言語学者ソシュールの記号論をベースに「テキスト」としての景観が生成する意味の連なりについて解釈するもので、諸先輩の研究も江戸名所図会や池泉回遊式庭園の空間を題材に風景体験の分析を試みるものが多かった。学生時代に風景研究の膨大な仕事の一端に触れたことが、今でも僕の設計の思考の基本的な枠組みに深い影響を与えているのは間違いない。

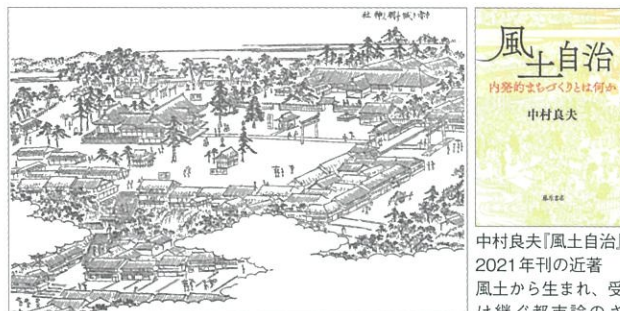
また、卒業論文を指導していただいた博士課程の先輩にはさらに直接的な影響を受けた。ベルント&ヒラ・ベツヒャーの一連の仕事について知り、ウンベルト・エーコ

の『薔薇の名前』を読んだのもこの頃だ。ザハ・ハディド事務所勤務を経た留学生の研究は、ニューヨークの地下鉄のポスターが幾重にも剥がれた痕跡が生み出す新たな意味を分析するユニークなものだった。

「見立て」と「意味」

そんな環境下で、卒業論文「都市構造物の転用に関するデザイン論的研究」を書いた。銭湯を現代美術ギャラリーとして転用した有名な「SCAI THE BATHHOUSE」の例に衝撃を受け、国内外の事例を分類・整理した。本来異なる機能のために設計された建築や構造物が、他の用途に使われており、機能的でもあり、またむしろ迫力を感じる事態とは何だろうという素朴な疑問から選んだ題材だった。理論的な枠組みに悩んでいたある日、中村先生は柔和な表情のなかに眼光鋭くじっと僕の目を見て、一言。「会田くん、これは要するに『見立て』なんだよ」。一気に方向性が定まり、がむしゃらにレトリック=修辭学の文献を読み漁ったのを記憶している。大学卒業時は想像もできなかったことだが、その20年後の2018年、空間デザイン総合監修を務めた宮崎県の都城市立図書館が開館した。廃業したショッピングモールを公共図書館として転用したものだ。まさにショッピングモールの空間的な特徴を図書館として「見立て」ることから始まったプロジェクトであることは、2023年冬号の『Bulletin』の特集記事で書かせていただいた通りである。

かくして僕は大学時代、デザインの分野に、技術や意匠からではなく「意味」の文脈から足を踏み入れた。一方で、当時、意味的な解釈だけでは設計=ものづくりは難しいというジレンマを感じ始めていたのも事実。留学して建築の基礎を学ぶことを真剣に考え始めていた。



江戸時代の赤城明神社周辺(「江戸名所図会」より)
現在のアトリエの位置は下部に見える「赤城坂」沿いの1階。
風景や街並みへの関心に導かれて辿りついた立地。